

第169回「防災まちづくり談義の会」レポート

(防災塾・だるま・ホームページ: <http://darumajin.sakura.ne.jp/>)

2019年7月

◆日時: 2019年7月26日(金)16:00~18:00

◆会場: 横浜市青少年育成センター 第1研修室(関内ホール 地下2階)

◆主催: 防災塾・だるま

司会: 早川雅子

記録: 中島光明

◆談義の会参加者: 会員 22名、一般6名(含む講師)、計 28名

話題: 意見交換会『必ず発生すると言われる東海・東南海地震
私たちの命は、生活は守れるか!』

松山順三氏

講師: 松山 順三氏 災害のパーソナリティ(元神戸市役所職員、
阪神淡路大震災時の須磨区対策本部)

24年前の阪神大震災を神戸市職員(教育委員会部門)として現場の災害対策に携わられた体験。その後各地で発生した自然災害の対応から見えてくる現状について、災害パーソナリティとして熱い想いを語っていただきました。そして、出席者と活発な意見交換することができました。



講師からの教訓:

- ・災害の規模が同じであっても、過密地では多数の死者が発生する(横浜市は該当する)。
- ・行政は災害予想を最大値で発表する、その結果が空振りであっても市民は安堵して受け入れるべき。
- ・近年の自然災害の要因を「地球温暖化」とは認めていない→異常気象。
- ・気象庁発表の「台風予想」に関心をもって見ていれば、過去の経験値と照らし正確な予測ができる。
- ・野外活動(サマーキャンプなど)の体験は、非常時に必要なサバイバル性を育成するのに効果的。

体験的な講話:

- ・災害発生直後の本能的な行動が重要: 家族よりペットを守り、イサカイの要因に(震災離婚)
- ・安全確認後、必要な家庭対策は、風呂場などに水の確保(近隣への炊き出しも可能)
- ・区役所が最前線基地になったが、被災現場を見て初めて被災状況が理解できた(当初はラジオ放送も被災状況は把握できていなかった: 神戸で地震があったらしい程度)
- ・3日目に九州からオニギリが届き、多数の避難者が分け合って配分できたが、時間がたつと奪い合いになった(銀紙包みのオニギリはダメ、バナナは美味しかった)
- ・避難所は、避難者の自主運営で行ったケースが成功した(他に役所、学校、ボランティア)
- ・学校の早期再開のためにも、学校と避難所を完全に切り離すべき(教訓となった)
- ・インフラが破壊された被災直後の緊急性のあるトイレ問題は、文明の力では対応できない
- ・2018年岡山市真備町の高梁川水害は、河川が満水状態なのにダムを放水したため
- ・真備町の水死者の多くは、自力で二階などに避難できない弱者が大半
- ・要支援者対応は民生・児童委員任せでは対応不可能(委員は20~30名担当している)
- ・ハザードマップには地盤・浸水などの情報が掲載されているので、市民は確認しておくこと
- ・自分には災害は起こらない(正常性バイアス)ではなく、子ども・孫のことを考えて対処する

<主な意見交換>

- 神戸市での職員の参集状況は: 消防職 60%、一般職はほぼ全滅
- 地域の絆づくりの妙案は: 自治会・老人会など昔は絆が機能していた、妙案はないが身近なところから地道に積上げることか。行政マンは誠意があっても3年で移動してしまう、市議員と意見交換するのも方策か。
- 行政マンに求める姿は: 非常事態において自身で決断できる能力。
- 被災時の課題が生かされたこと、まだ残っていること: 幾多の課題がマニュアル化された。



意見交換会前の報告:

・2011年ニュージーランドで発生した大地震(死者: 日本人28名を含む185名)のその後、及び本年3月に発生した銃乱射事件(死者50名)について、本年5月現地クライストチャーチ訪問の中島光明さんからレポート。

2回目のニュージーランド紀行
-2011年地震&銃乱射事件->
初編: 2011年12月 今編: 2019年4月(2年経)



●次回(第170回)案内

- ・日時: 2019年9月27日(金)16時~18時
- ・会場: 神奈川大学 1号館308-1室
- ・テーマ: 新防災ゲーム3種の紹介と「防災めぐり こども版」の体験 片山 晋氏: 防災塾だるま副塾長